様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　９ 月 １０ 日現在

機関番号：３４４２６
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ１２２８８

研究課題名（和文）近世領主説話と地域社会の創生ー体制移行期の説話研究として

研究課題名（英文）A Study of Early Modern Lords' Tales and the Creation of Local Communities

研究代表者
南郷　晃子（中島晃子）（Nango, Koko）

桃山学院大学・国際教養学部・准教授

研究者番号：４０７０９８１２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域の写本を中心に、体制移行期の地域領主関連説話の形成・変容および説話による地域社会の創生について考察を進めるものであった。断絶した武家と紐づけられた女の「祟り」の物語や城内に残る怪談など、地域写本に領主関連説話が多く含まれることを俎上にあげ、今現前にある場の景観に地域における「歴史」の語りが重ねられ、さらにそれらの基層に神霊の物語があるという重奏性を持つ説話が含まれることを説話の意味内容とともに明らかにした。これら「重奏性」のうちには、技術者や武家によるアイデンティティや利権の獲得といった、社会体制の変容に伴う運動があることもまた本研究を通じ明らかにしたことである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
これまで近世説話の形成と変容と社会変動との関係は、抽象的なものにとどまるか、あるいは宗教活動と紐づけられる傾向があった。しかし本研究を通じ、具体的な技術者集団と説話との相関関係の存在を明確にしたことで、説話が人々の体制への働きかけとしての意味を持つこと、またそういった営みが物語を作るという構造を提示することができた。また、十分にその意義が認められているとは言い難い、地域社会に流布する写本の重要性を、歴史認識を含む地域のアイデンティティ形成、そこに含まれる説話の持つ独自性という点から明らかにすることにできた。

研究成果の概要（英文）：This study examined the formation and transformation of tales about feudal lords during the System transition period and the creation of local communities through the stories, focusing on regional manuscripts.
Through this study, I showed the fact that many local manuscripts contain stories related to feudal lords, such as a clan disconnected by a woman's "haunting" or a ghost story in the castle. Such tales have polyphonic characteristics, the landscape of the place in the present is overlaid with local "history" narratives, and that the underlying narrative of the divine spirit.
Moreover, this study clarified such polyphonic characteristics contains the activities of the workers and warriors for obtaining their identities and interests during changing society.

研究分野：近世説話

キーワード：領主説話　藩祖　家祖　移行期　怪異譚　神霊　地域伝承　写本

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

研究開始当初、歴史学においてはすでに旧領主に絡めた由緒語りや領主祭祀が注目され、研究が展開していた。歴史学の視点から由緒といういわば「偽」なる語りが、人々の社会的な営為として捉え直されていた。しかし物語そのものに主軸をおく文学サイドからの、地域領主説話に関する研究は不足していると思われた。事実「らしさ」を語る説話は当然「偽」か「真」か、という二項対立に飲み込まれることはなく、社会状況が物語とどう相関関係を持つのかということも、説話の領域で問われてきた。これらの説話研究の手法、問題意識を以て、領主に関する説話を扱うことで、変動期における社会を生きる人々の意識と営為と物語との相関関係が明らかになると思われた。

さらに地域社会には領主に関する説話は多く残されているにもかかわらず、その検討は十分ではなかった。理由の一つに、いわゆる「近世文学」研究が、版本に焦点を当てる傾向があったという点が指摘できる。過去の領主や、領主家についての、噂、伝承はしばしば地域社会に残る写本に含まれる。本が編まれる目的は（基本的には）収益の獲得でなく、自身の場への関心である。地理的な知識の共有を前提としながら、地域の寺社や特定の家、個人について語るこれら写本の研究自体が不十分であった。それはすなわち、近代の郷土意識につながる自らの場所への関心に立脚する説話への目配りの欠如であった。今、ここ、への関心からの領主(旧領収)説話の収集があるという事実ごと研究の俎上に挙げる必要があった。

また、文学研究においては、近年「歴史意識」との兼ね合いがしばしば議論の俎上に上がっている。しかし、その物語研究において「歴史意識」に配慮するとは、ただ物語を時代の産物として捉えるということではなく、物語がいかに時代を生み出すのかという点をも見ていく必要がある。このような点から、特に社会と物語との影響関係、緊張関係が先鋭化する移行期に注目した。

２．研究の目的

本研究は、近世移行期および近代移行期における地域領主関連説話の形成・変容並びに説話による地域社会の創生について、説話に関連する人々の「運動」という側面から考察するものである。事実「らしさ」を有する「説話」を考察する上では、テクストをとりまく社会状況もしばしば説話背景として検証されるが、本研究においてはそれらを説話背景として捉えるのみでなく、説話自体が社会への働きかけたりえるものとして研究を進めた。すなわち地域の社会状況を背景に形成される説話という観点に加え、ひるがえって説話が地域社会を形成していくという運動でもあるという位置付けとともに、当該時期の領主説話の詳細を明らかにすることを目的とする。

また地域の写本や一般に「歴史資料」と捉えられる「イエ」の資料をみていくことで、当事者による「説話」という視点を組み込みながら、説話検証を行う。

３．研究の方法

具体的な説話に焦点を当て、そこに現れる神霊はもとより、領主、武将、宗教者といった個々の名について、可能な限り追うことで、説話を立体的に捉えることを行った。通常はあまり文学研究において使用されることのない、「史料」として見なされる家譜なども含め、ひとかたまりに説話世界として掌握するということを試みた。また同じ神霊、同じ武将を語

る地続きの説話を追うことで、説話の管理者の変容およびそれと不可分な地域社会の変化を掌握することを行った。また扱う資料および説話がなぜ、誰にどのような意味を持ち、それぞれがどのように影響し合うのかを位置づけていくことを行った。特に池田家と「オサカベ」、森家および堀主水と「お花」の説話を主軸におき、イエと説話また領主家との緊張関係を持つ地域社会と説話の動態的なあり方を把握した。

研究を進める手法としては、当初文献調査とインタビューを伴うフィールド調査を併せて行うことを予定していた。しかし新型コロナウィルス感染症の流行により、対人調査を伴うフィールド調査は中止せざるを得なかった。また文献調査も本来各地の資料館・図書館などでのみ確認できる地域資料を使用する予定であったが、移動の制限により十分に行うことができなくなった。

そのため研究対象・内容についても変更を行い、当初予定していた大内家に関する説話は扱わず、代替処置として、これまでの研究実績を展開して進められる津山の「お花」伝承について、森家との関連とともに流布説話との影響関係の検証および、話型から再考察をするという方法をとり、移動制限下で可能な形での研究を行った。その後行動は緩和されたが、今後の行動がどの程度可能になるか不透明であったこと、調査地側の病を持ち込まれることの警戒心に配慮し、フィールド調査はインタビューを伴わない、地理の確認や実地検分などにとどめ文献調査を中心に行った。

また「お花」モチーフの広がりという新たに得られた視点を生かしながら、「お花」に祟られた掘主水という近世移行期に家ごと無残な最期を遂げた武将をめぐる会津の説話に焦点を当てた。ここにおいては、同地で成立し同地に流布した地域の写本『老媼茶話』を中心的に利用した。現地での調査の不足を補うため、説話の基層となる物語世界との紐付けとそことズレゆく点を検証し、精読を中心とする説話の構造分析を行った。これにより、フィールド調査を伴わない形での研究の継続を可能にした。

使用する文献は、版本資料とともにこれまで近世文学の分野では十分に生かされてこなかった写本資料を主に利用した。具体的には地域社会についての興味・関心をまとめた地誌的文献とともに、武家の家伝や寺院資料など関連資料を、ジャンルを問わず博捜し立体的に説話を理解することを試みた。これにより多角的に説話を管理したのは誰が、何者がどのように語るものとしての説話なのか、またその管理者が変わったときに説話がどのように変化するのかという有機的な検討、考察が可能になった。

４．研究成果

①「「御家」の神霊の近代的展開―近代井原における「おさご」伝承を中心にー」『説話・伝承学』第 27 号、2019 年

井原陣屋領主、池田家のイエの神霊であった「おさご」が近代への移行期にあって、「尾砂子講」の管理する神霊になった事例についての考察を行った。地方名望家集団としての紐帯を保つ尾砂子講に管理されるにあたり、尾砂子説話は地域の始まりを語るものとしての意味を持つことを示した。

②「城の説話と大工と天狗―姫路城「天狗の書状」をめぐって」説話・伝承学会『説話・伝承学』第 28 号、2020 年

「オサカベ」伝承において、拙稿においてかつて大工の役割を指摘したが、その実体は不明瞭であった。本稿において大工の家である「日原家」旧蔵の資料の存在を明らかにし、同家においても「八天塔」建立が重要なものとして伝承されたいたことを確認した。これまで伝

承研究・説話研究においては、技術者については技術者自身の縁起への着目という観点はあったものの、地域社会に広がり行く説話と影響する技術者のイエの縁起には、十分焦点があたってこなかった。しかし、本研究を通じ、領主に関する説話を生成する一角に寺社ならず技術者もまた存在するということを明らかにすることができた。

③「松山城―蒲生家の断絶と残された景色」二本松康宏、中根千絵編『城郭の怪異』2021年、三弥井書店

松山城には蒲生家に関わる怪談がいくつか残っているが、松山城の怪談のうちには、しばしば松山城主であった蒲生忠知に関連する説話が見出される。蒲生家は伊予松山藩を一代のみの支配で終わらせたイエである。支配者の変化に伴い、城内の「場」の意味が変化すること、さらに記憶・情報が絶え意味を喪失した場が、かつての支配者のときに不吉なことがあったという語りとともに、怪談の場所になっていくことを明らかにした。支配の断絶が、その不吉さや挫折、さらには新領主への肯定的な語りという意味合いに加え、情報の断絶とそれに伴う景観の読み替えとしての意味を持つことを示した。

④「奇談と武家の記録―雷になった松江藩家老」東アジア怪異学会編『怪異学講義』2021年、勉誠社

松江藩家老家乙部家のイエの記録として残る家祖伝承を中心に考察を行った。近世流布した版本『本朝故事因縁集』にみられる武家の「祖」をめぐる説話が、翻って武家自身の「イエ」の語りとして取り入れられていった過程を明らかにした。近代移行期へと進む、不安的な時期に、「奇談」つまり不思議な話のひとつとして版本で「消費」されていた家祖伝承が、家祖が忠義の人であったことを示す逸話として、楠木兄弟の忠義の物語とも連続しながら読み替えられる。版本に取り上げられた奇談を足場に、家祖が神格化していくことを示した。

⑤「花の名を持つ女―むごく殺されるお菊、お花をめぐって」木村武史編『性愛と暴力の神話』2022年、晶文社

武家をめぐる怪異譚の典型ともいえる虐待された下女や妾など周縁にある女が武家のイエを絶やすという話について、神話の構造と比較しながら解釈を行った。お菊、お花という花の名を持つ女が、命を育むものとしての基層を有しながらも、命ひいてはイエを絶やす者になる。武家のイエが絶え、支配が終わるという社会体制の変動をひとりの女に紐づけるという、ある意味アンバランスにみえる物語に、景観および「花」の象徴性が含み込まれていること、それでいて近世の社会構造の枠内の物語であることを指摘した。

⑥「『老媼茶話』の魔術」斎藤英喜編『文学と魔術の饗宴　日本編』小鳥遊書房、2024年９月

『老媼茶話』に含まれる「魔術」の検証のうちに、4)で扱った、加藤家に反旗を翻した堀主水が「お花」を虐殺しお花が幽霊として現れるという話も含め、より細かな検証を行った。『老媼茶話』における完全なる死者＝執心を残さぬ死者は、白骨化するものであるという考察とともに、お花には僧侶により救いが与えられること、そして堀主水は救われなかったものであることを示した。

⑦コラム「猪苗代の城化物――亀姫と堀主水」共著『〈江戸怪談を読む〉丹後変化物語と化物屋敷』白澤社、2024年９月

姫路城のオサカベ伝承を踏まえながら現れる猪苗代城の「亀姫」が、加藤明成の家臣で失脚の末一族郎党ともに壮絶な死を遂げる堀主水に関する語りと近接する要素を持つことを示した。また版本を介して広く知られていったオサカベ伝承が、城主の土地神による拒絶と、その先に準備される不幸という形を提供するものとして、地域の過去を語る説話のうちに

引き込まれていくことを明らかにした。
以上の研究成果について、以下の二点から概観を示す。
・地域写本と景観、「歴史」について
　本研究で主に利用したのが、各地の資料館や図書館など地域社会が有する写本である。例えば③では『松山俚人談』および伊予松山の軍学者村井知衡がまとめた『必笑雑話』、⑤⑥⑦においては会津藩士三坂春編がまとめたとされる『老媼茶話』を中心的に扱った。これらは地域社会で作られ、読まれたものであり、自らの地に関する物語を自ら語り読むという行為を伴うものであった。場に密着しながら、語り・読むという行為は、説話を生きるもの、有機的なものとする。さらにそれが領主と関連する物語の場合、土地の「歴史」意識を取り込み、ときには「歴史」意識を作ることが注目された。それは、説話を通じ利権を獲得する活動になり、自らの領主と関連するアイデンティティの生成になる（①②）。
　また地域写本においては、自身の地域のことを語るがゆえに、見知った景観がいかなる意味を含むのかを深化させる傾向がある。説話が景観を取り込み、景観が説話を作るという景観と説話との相関関係が③⑥に見出せる。③においては、土地のかつての所有者＝去って行った旧支配者であり、蒲生家が絶えたイエであるということを踏まえた上での場の呼び方と景観の再解釈が行われ、怪談の生成が行われている。
　また写本に含まれる説話がしばしば版本の影響を受けながら、その土地独自の過去を語り直すものになることを⑦は示す。またこの独自の要素こそが、説話が誰にとって、何のためにあるのかということを示すものである。
　④は、地誌や説話集ではなく、松江藩家老家のイエの記録を扱った。そこでは、流布版本のうちに含まれる同家の話を組み込み、近代移行期の聖なるイエの語りを完成させていく実体を明らかにした。武家の物語は、地域に共有される物語であると同時に、そのイエにとっての家傳の一部にもなり、さらにそれが「現在」のイエのアイデンティティを形成し、行動を規定するものであった。
・「運動」と説話について
　人々の「運動」としての説話を検証するという側面、近代移行期を扱うということについては、新型コロナウィルス感染症の流行による行動制限とそれに伴う方針転換により、不十分に終わらざるを得なかった。その上でこの点を検証できたのが、コロナウィルスの流行の影響が大きくないうちに、資料を集めることのできた①②と松江歴史館のご協力を得て資料を入手できた④である。①は、近代以降において新たな地域社会を作る活動の中で、旧領主の抱えた神霊が地域の始まりを担う女に語り直されることを示した。②は池田家支配の終了に伴う説話としての側面を持つオサカベ伝承が、むしろ池田家に接近しようとする技術者の活動と関連するという視点を元に展開した。宝塚市立図書館に残さていた大工の棟梁家、日原家の資料は、これを裏付けるものであり、技術者の活動が播磨における「オサカベ」伝承を形作るものとなっていることを確認することができた。しかし、資料の旧所蔵者が辿れなくなっており、そこにアクセスできていないという課題も残る。また、④は、説話内容自体は近世移行期を語る家祖の説話が、「忠」の観念に重点を置く家祖と藩祖の説話として近代移行期のイエが不安定になっている時期に語り直され、さらに家祖の神格化につながるという事例であった。体制が動こうという時期に、説話の再解釈、再創造を行うことで、家祖、ひいては自らのイエの位置づけを生み出していくという運動の一角であったと位置づけることができた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 南郷晃子	４．巻 28
２．論文標題 城の説話と大工と天狗―姫路城「天狗の書状」をめぐって	５．発行年 2020年
３．雑誌名 説話・伝承学	６．最初と最後の頁 127-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 南郷晃子	４．巻 27
２．論文標題 「御家」の神霊の近代的展開ー近代井原における「おさご」伝承を中心にー	５．発行年 2019年
３．雑誌名 説話・伝承学	６．最初と最後の頁 119－135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 南郷晃子
２．発表標題 山伏と築城に関わる怪異譚の考察
３．学会等名 説話・伝承学会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Koko NANGO
２．発表標題 SAN-JIN ,Hunter, and Christianity―the overlapping image of the missionaries and imaginary people living in the mountain
３．学会等名 International Conference on Comparative Mythology（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

1．著者名 二本松康宏、中根千絵、小田倉仁志、堤邦彦、林順子、久留島元、北川央、三宅宏幸、菊池庸介、南郷晃子	4．発行年 2021年
2．出版社 三弥井書店	5．総ページ数 222
3．書名 城郭の怪異	

1．著者名 大江篤、榎村寛之、久禮旦雄、佐々木聡、久禮旦雄、山田雄司、南郷晃子、赤澤春彦、杉岳志、細井浩志、佐藤信弥、佐野誠子、山田明広、久留島元、笹方政紀、陳宣聿、木場貴俊、木下浩、村上紀夫、木場貴俊、山本陽子、化野燐	4．発行年 2021年
2．出版社 勉誠出版	5．総ページ数 416
3．書名 怪異学講義	

1．著者名 Hiroki Ogasawara, Fumiko Sukikara, Gracia Imberton Deneke, Gianluca Gatta, Hirotaka Inoue, Masato Karashima, Seigo Kayanoki, Ayami Nakatani, Koko Nango, Jose Luis Escalona Voctria	4．発行年 2021年
2．出版社 神戸大学出版会	5．総ページ数 125
3．書名 Materialism of Archive 記憶のマテリアリズム	

1．著者名 氷厘亭氷泉、江藤学、今井秀和、三浦達尋、鷲羽大介、南郷晃子、広坂朋信	4．発行年 2024年
2．出版社 白澤社	5．総ページ数 224
3．書名 〈江戸怪談を読む〉『丹後変化物語と化物屋敷』	

１．著者名 斎藤英喜、金沢英之、小川豊生、南郷晃子、一柳廣孝、梶尾文武、清川祥恵、植朗子、渡勇輝、蘆花公園	４．発行年 2024年
２．出版社 小鳥遊書房	５．総ページ数 184
３．書名 文学と魔術の饗宴〔日本篇〕	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関